

「神話の国家主義的な解釈を使い、相談者を励ます—現代日本の霊能者を訪れる」

ヤニス・ガイタニディス(リーズ大学、イギリス)

明治時代の初期から当時西洋で流行っていた思想信条が波のように日本を浸水させた。その中、英米のスピリチュアリズム(心靈主義)とフランスのスピリティズム(心靈術)などの近代呪医・宗教的な概念と活動が日本の巫覡(ふげき)・修験者に影響を与えた。

その「あの世」のコスモロジーと非科学的な理論の一致から日本の霊能力者が新しく生まれ、時代が変わりつつ日本の呪医・宗教的な職能者は霊とその者と交渉する方法・病を持っている相談者向けの説明モデルなどに関して非常に多角的に発達してきた。

1980年代以来日本の霊能力者は再び人気を博した。ニューエイジ運動、メディアの普遍性、バブル経済、社会変動の中から霊能現象は改めて消費主義化され、セラピー文化に満ちたポスト・モダンの日本人の悩みに答えようとしている。

私は日本の霊能者をインタビューした経験から、国家主義的な発言・思考がよく出てくるということが分かった。これは日本で活動している霊能者の独特の特徴であるとプロル氏が述べている。[Prohl, Inken. "The Spiritual World: Aspects of New Age in Japan." Handbook of New Age. Eds. Daren Kemp and James R. Lewis. Leiden: Brill, 2007. p.373].

しかし、ヨーロッパの右翼的なグループのイデオロギーと同じく、日本の霊能者の国家主義な思想はよく知られている神話の再解釈を含め、他人に誇りと力を生み出す目的をいつも目指している。

そのような再解釈は二つのステージに別けられる。まず、霊能者は神話のシンボリズムを新しく説明する時に、自分のコスモロジーが日本の歴史と繋がっているということを証明したがる。次に、日本の特異性を強調しながら、人生と未来の秘密は日本人しか知らないということを目指している。

本発表は以上のテーマを例証するためにある霊能者の話を使うつもりである。この霊能者は霊能活動以外僧侶、慈善家でもあると言われている。彼は個人的なセッションもセミナーも行っている。私はセミナーに参加して、聞いた二つの神話の再解釈を今回発表したいと思っている。一つはイザナギとイザナとその子供(アマテラス、ツクヨミ、スサノオ)についての神話である。もう一つは三種の神器である。